

すずかけ台駅名由来記
谷口 修（本学名誉教授）
1972年

東急田園都市線が国鉄横浜線と交叉する駅が長津田で、そこから小田急江の島線の中央林間駅に向かって延長が計画されて、その最初の駅が「つくし野」、そしてその次の駅「すずかけ台」まで今年の四月一日に開通した。この駅は東工大の第二キャンパス下車駅で、大岡山との間が約一時間で直通したことになり、急行電車ができると、もっと早く往来できるようになる。

「すずかけ台」という駅名の発案者が私であるということで、開通の日には同駅の日駅長をつとめ、地元の人々とともに、将来の発展を誓ったというようなこともあって、ここにその由来を紹介したい。

この新キャンパスには、大学附置の研究所が移転するとともに、新構想の大学院の新設が計画されている。大学の附置研究所というものは、単に研究を生産していればよいといったものではなく、同時に絶えず新しい研究者が育っていく場所であればならない。そのためには研究者の卵を育てる大学院と切離すことができない。そこから新しい血を輸血して常に研究所の新陳代謝をはからなければ、研究所は骨董品と化してしまうおそれがある。また逆に大学院学生は常に研究の雰囲気の中で勉強する必要のあることは論をまたない。

大岡山には既に確立した大学院があり、新キャンパスの大学院をその組織のなかに含めてしまうと、いたづらに煩雑さを増す許りとなることが予想される。人間は紙の上のプランで生活しているものではなく、現実には地理と時間の座標の上で生活しているからである。そのようなわけで独立して動きうる新しい大学院を樹立することが最もよいということになる。

戦後、特に最近、学問の地図は大きく塗りかえられようとしている。曾ては境界領域といわれた学問が、研究の領域においてはむしろ主流としてのし上って来ており、従来の学問体系を縦糸とするならば、まさに横糸を形成している。よって大岡山では学部から大学院までを一貫した伝統的な学問の場とし、新キャンパスは研究所と新しい大学院とで、学際的な研究を開拓する場とすることが、現在最も有意義な計画であるということが出来る。この計画を実現するためには、学部を持たない大学院だけの組織を新設することを大学の設置者である国が認めてくれる必要があるが、この計画は大学改革の一つとして多くの支持を得ており、着々実現に近づきつつあるということが出来る。

現在、大岡山にある研究所の移転と新しい大学院の建設には、なお数年を要するであろうが、完

成の暁には、わが国として全く新しい一つの学問の場が誕生することになる。そのような希望にあふれた新しいアカデミアの玄関口になる新駅の名前には、それにふさわしいものが欲しいというのが、大学側の皆の気持であった。東急側もこの気持を受けて、よい名前があったら提案してほしいということであった。このような経緯で、大学から「すずかけ」の名が提案され、東急側もこれを入れて、ここに「すずかけ台」という駅名が誕生した次第である。

スズカケはいうまでもなく、スズカケノキのことである。田園都市線の駅には、藤が丘、青葉台、つくし野といった植物に関係のある名前がつけられているものが多い。そのようなことで、花言葉のなかから学問研究に因んだものがないかと探してみた。花言葉は感情とか吉凶といった性質のものが多く、学問研究に関係ありそうなものは、ごく僅かしかなかった。そのなかで最もふさわしいと思われたのがスズカケノキであった。

スズカケノキは学名プラタナス・オリエンタリスとよばれ、明治年間に街路樹としてわが国に輸入され、プラタナスの名前の方が通っている。花言葉は天才あるいは天恵である。この花言葉のいわれは次のようである。

スズカケノキは西アジアの原産で、ヨーロッパでは古くギリシャ時代から親しまれてきた。紀元前三八〇年頃、哲人プラトンはアテネの北西郊外にアカデミアを創設して、哲学、数学、天文学その他の諸学の研究と教育の場とした。これが近代のアカデミーや大学の元祖であるといわれている。アカデミアにもスズカケノキがたくさん植えられ、プラトンはしばしばスズカケノキの木陰で弟子どもに講義し、また瞑想にふけたという。これからプラトン・プラタナスにひっかけて天才の花言葉が生れたということである。

まことに母校が計画する新しい学問の場にふさわしい花言葉の木であるといえる。この新しいアカデミアが見事に成長することを心から祈念するものである。すずかけ台の駅名から、よくあの辺にはスズカケノキが多いのですかと質問される。多分ほとんどないのではなからうか。大学はこれからキャンパスのメインストリートに約千本のスズカケノキを植える計画であるという。また駅から大学まで三〇〇メートルの道路にもスズカケノキの並木を植えるように働きかけることにしているという。東急も駅前の広場にスズカケノキを植えなければといっている。

スズカケノキはわが国では街路樹として頭をちょん切られて、みじめな姿を見ることが多いが、元来は樹高二〇メートルに及ぶ落葉樹で、成長も早く、公害にも強い木である。したがっていじめることなく育てれば、やがて緑濃きスズカケの並

木道が駅から大学までつづくことであろう。春、葉のつけ根に淡い黄緑の花が数個集まって球状の花が咲く。葉は欠刻の深いカエデ状の広い葉である。晩秋、葉の落ちた梢には、長い柄の先に堅い球状の実が二、三個ずつ鈴なりにになっているのがみられる。

スズカケの名は明治初年、この木の球状果が、山伏の着る篠懸衣についている球状の飾りに似ているところから篠懸木と命名されたが、いつの間にか球状果が鈴なりにつくという意味で鈴懸木とか鈴掛木とか書くようになったということである。スズカケは旅の枕言葉でもあって、駅の名前としてもふさわしいものということができる。

新駅は当初聞くところによれば「南つくし野」と内定していたということである。それが開通直前になって大学の要望をいれて「すずかけ台」になったのは蔵前先輩の東急田中勇副社長の御尽力によるところが大きい。末筆で大変失礼ながら心から感謝の意を表する次第である。

一日駅長日記

四月一日、日曜日。今日から開通のすずかけ台駅に着く。ただちに駅舎内で用意してあった駅長の制服制帽に着替える。

まず担当の部長から辞令を受けとる。

「田園都市線つくし野 - すずかけ台間開通式にあたり、すずかけ台駅一日駅長を委嘱します。昭和四十七年四月一日、東京急行電鉄株式会社」とあった。定年退職して最初の再就職である。

駅長席について朝礼がはじまる。助役から駅員の紹介、当駅の設備について説明があって後、一日駅長として訓示をおこなう。一日駅長となった顛末を述べた後、四〇年前の大井町線ののんびりした情景を話し、住宅町では駅が市民生活の要となるので、朝夕気持よく町の人を送迎してほしい旨希望し、有名な「すずかけの小径」を当駅のテーマミュージックとして朝夕流してはどうだろうかと提案した。

工業材料研究所の龍谷先生が早朝からカメラを持って記念写真をとっておられる。訓示中のかしこまった顔もフィルムに残ったことと思う。研究所が当地に移転することの記録写真の一コマにされるということである。ほかに何人かの先生もひやかしに見えられた。

朝礼が終ってプラットホーム、駅前広場などを巡視。すずかけ台は、まだ区劃整理をしたばかりで、これから買手を待っている「南つくし野」住宅地を前景に、東工大の新キャンパスを背景に持った将来有望な駅であるが、目下は人家も稀な状態であるから、人手を減らして隣のつくし野駅から遠隔操作するようになっている。今日は朝から

電車が到着する度に、少年ファンがおしかけて記念キップを買いにくる。

十時四十七分、開通式を祝う祝賀電車が花を飾って到着。これを出迎え、五島社長以下の面々を誘導して、プラスバンドの奏楽のなかを祝賀会場に向かう。今日は天気晴朗ながら寒風が強く、天幕がぴゅうぴゅうと鳴った。

会は五島社長の挨拶、運輸大臣代理、地元代表の祝辞のあと、私がすずかけ台の礼讃を一くさりやって東急と地元の繁栄を祈念して万才三唱した。

宴を閉じ、駅舎に戻り、キップ自動販売機の裏をあけたりして暫時、時間をつぶしてから平服に着替え、無事一日駅長の任務を終え、制服制帽を記念に頂戴して帰路についた。

駅前には気持ちのよい広場があるが、まだスズカケノキは植えられていない。今度訪れるときは、それは多分研究所が一つか二つできて移転披露のあるときだろうが、駅から大学キャンパスまでスズカケの若樹が植えられていることであろう。

スズカケキャンパスの繁栄を心から祈るものである。

すずかけの木よ

春には、萌え出ずる若芽に陽光がそそぎ
その下には団欒の場所をつくってくれる

夏には、緑濃き葉もて涼しい木陰をひろげ
その下に微睡の場所をつくってくれる

秋には、色あせた病葉吹く風にそよぎ
その下に思索の場所をつくってくれる

冬には、裸の木末に鈴の実をつけ
その下に安らぎの場所をつくってくれる

すずかけの木よ

遠い昔、アテネの丘に
哲人の集いを見守ってきた

プラタナスよ

今再び、新生のこの地に
力強い創造の根を張っておくれ

<長津田キャンパスの駅名が「すずかけ台」と決まったことを記念して> (1972)

参考：古代アテネでは、プラトンの他、アリストテレスやヒポクラテスもプラタナスの木陰で講義をしたといわれている。東京・広尾の日赤医療センターの庭には、「世界医学の祖ヒポクラテスの故郷コス」の町の中心広場に、今も大きい『すずかけの木』が一本あって、ヒポクラテスは晩年、その木陰で弟子たちに医を説いたと言われ、いつの頃からか『ヒポクラテスの木』と呼ばれています」とある。